

令和5年度 全国公立学校 教頭会研究大会 石川大会を終えて

石川大会実行副委員長

高木 布三代



● 石川大会を開催するにあたって

石川大会に向けての準備が少しずつ動き出したのは、平成31年度頃からです。当初は、3日間の大会を2400人の参加型で行う予定で、大きな会場を予約していました。しかし、コロナ禍の到来により、計画の変更が相次ぎました。大会の形も「オンラインのみ」「分科会のみ参加（全体会はオンデマンド）」などを模索・提案し、結果的に令和3年度の末に「ハイブリット開催」となることが決定しました。この頃は、まだ新型コロナウイルス感染症の位置づけが2類相当であり、大規模なイベントや会議を行うには様々な制約がありました。5類に移行するのではないかという話が聞こえてきたのは、令和4年度の冬頃からだったでしょうか。ですから、感染症対策について世の中がどのような状況になるのか予測が極めて難しい中、我々は大会初のハイブリット開催に向けて準備を進めてきました。

感染症対策として一番の課題は、参加者の接触をどの程度押さえられるかということでした。クラスターが起る危険性を少しでも低くするため、全員を同一会場に集めないということになりました。全員が参加できる会場は、キャンセルせざるを得ず、全公教とも何度も議論を重ねた結果、会場を7カ所に分け、分散会場にするという事に決まりました。会場の確保には、非常に苦労しましたが、メイン会場を駅

近くのホテルに置き、他4ホテル、2施設を確保することができました。車で移動すれば、離れた会場でも10分程度の距離ですが、参加していただく方にとっては、1日目の全体会から会場が分かれていたり、メインホテルにいるのにオンライン配信であったりと不都合な点があったかと思います。また、大会スタッフにとっても、総括となる事務局本部が離れた場所にあるすぐに対応できないことがあり得るという面において、運営のしづらさがありました。それでも分散会場にせざるを得なかったのには、こういった背景があったからなのです。

しかし、大会当日、金沢の中心部にある各会場に行くためには、金沢の町並みを横目で見ながらの移動となりました。「金沢の文化が町のあちこちに見られ、それもまた楽しかった。」という温かいお声も多数いただきました。各会場の運営を任せられたスタッフも、「自分たちで成功させなければ…」という思いによって、よりまとまることができたと思います。

● オンライン配信するための準備

配信は、メイン会場から各会場にお越しただいている参加者と全国のオンライン参加者の皆様に行います。到底、我々スタッフだけでは行うことは不可能です。

全国へのネットワーク配信については、全公教本部

が担当し、専門性の高い配信業者に業務委託することが規約で決まっています。配信業者は東京に本部があるので、打合せが大変です。数回は金沢まで来て現地を見ていただきましたが、ほとんどのやりとりはメールか電話が中心となります。庶務部が中心となって行っていくわけですが、会に向けての準備が進む中で、シンポジウムや分科会のことも密接に関係してくるため、あれやこれやといった課題が出てきます。その都度、細かな調整が必要となり難しい面がたくさんありました。各会場を結んでの実際の動作確認ができるのは、前日と当日のリハーサルのみとなります。いくつか不安な面を残しつつの本番となりましたが、本番ではしっかりと修正していただき、大きなトラブルはありませんでした。1日目終了後に急遽お願いした件もあったのですが、それにもすぐに対応していただきました。大会後、アンケート結果より配信についての良い面や改善点も見えてきています。この大会での実績が、次の大会に生かされるであろうことも成果の一つではないでしょうか。

● シンポジウム・記念講演について

シンポジウムや記念講演の講師をどなたにお願いするか、これも非常に大きな問題でした。石川にゆかりのある方か、テーマに迫れる視点でお話をする事ができるメンバーか、参加して下さる皆様に何かしらの気づきや学びを提供するには…。何人もの方の名前があがり、検討を重ねました。最終的には、シンポジウムコーディネーターに國學院大学の教授 田村学氏、シンポジウムに加賀屋グループ女将の長谷川明子氏、湘南学園の学園長 住田昌治氏、加賀市教育委員会教育長 島谷千春氏、講演会講師に金沢21世紀美術館館長 長谷川 祐子氏をお迎えできることになりました。

シンポジウムでは、「教師力の育成」、「人材育成と組織の在り方」、「働き方改革」の3つの視点を織り交ぜてお話しいただきました。また記念講演では、「豊かな感性を育む場所をつくる」の演題で、学校が社会で果たす役割との共通点や持続可能な社会の創り手としての子どもたちを育成するための学校の役割等多くのご示唆をいただきました。これ以上なのではないかという方々にお引き受けいただき、シンポジウム、記念講演ともに大成功でした。それは、参加者皆様の振り返りにも表れており、胸が熱くなりました。

●分科会について

この大会のメインである分科会討議ですが、先にも述べたように10分科会を7施設に分かれて行うことになりました。この分科会でそれぞれの提言（第6特I特IIは講演）を受けた後、参加者お一人お一人がいかに自分事として語り合えるかが分科会を成功させるカギであると考えました。協議に主体的に参加できれば、得るものや満足度が高いであろうと考えたからです。それには、それぞれの分科会運営に関わる石川の教頭が分科会に対しての共通理解をしていなければならぬということになります。研究部を中心として何度も会議を重ね、その仕組みをつくっていききました。分科会全体の流れ、グループ協議の人数構成、座席配置、オンライングループの人数、グループ協議のシナリオなど、一つ一つが分科会の充実につながると意識して準備を進めました。また、提言者の先生方が引き受けてよかったと思っただけのことでも大事なポイントでした。1年間かけて石川県研究部として提言者のサポートを行ってきました。大会当日、「オール石川」の合い言葉のもと、石川のメンバーは、できる限りグループ協議に入り司会や記録を担い、協議の活性化を目指しました。また、東海北陸や全国の先生方に

もご協力いただき、提言内容を理解した上で司会にあたってもらいました。司会や記録を任せられた人は、自分が、この分科会の討議を引っ張っていくのだという思いで話し合いを進めてくださったと思います。参加者からのアンケート結果はおおむね高評価で、「提言やグループ協議での全国各地の教頭との交流や情報交換が有意義だった、学校運営に生かしたい」など、満足感を得ていただくことができました。研究大会の大きな成果だと感じています。タイムスケジュールや配信トラブルなどの課題もありましたが、次年度大会へつなげていければと思っています。

●大会を運営するにあたって

「持続可能な大会にする」ということも、この大会運営でのテーマでした。できるだけコンパクトに時間や物の無駄を省いていこうという視点で準備を進めました。印刷物を減らすためにメールやホームページを積極的に活用しました。ホームページの中に「大会参加者専用サイト」と「提言者専用サイト」を作成し、その両サイトから情報発信を行いました。また、クラウドを利用することで、「運営」・「提言者」・「助言者」・「講師」・「配信業者」が容量の大きいデータであっても即時に簡単に情報共有ができるようになりました。

また、せっかく金沢にお越しいただいた参加者の皆様には、参集ならではの良さも感じていただけたらと思います。そこで、会場ごとに初日から座る場所を固定し、二日間同じメンバーで交流を深めてもらうようにしました。昼食をお弁当にしたのもそういう意図があったからです。知り合った教頭同士が語り合いながら、石川の食にも触れられる昼食時間だったという感想もいただきました。大会二日目を終え、グループで記念写真を撮ったり、メールアドレスを交換したり

する場面も目にしました。時間を割いて石川に来ていただいた甲斐があったと思っただけであれば幸いです。

●最後に

大会を終えると同時に、石川大会アンケートフォームにたくさんのお意見が寄せられています。参集約1300名、オンライン約1900名、両日ともに約3200名の全国の会員の皆様に参加していただき充実した協議の場を設けることができました。大会初のハイブリット方式での開催についてのアンケート結果は、「よかった」「どちらかといえばよかった」合わせて93%の肯定的な評価をいただきました。参集参加者の意見として、・参集、オンラインを選択できるのでよい・多くの副校長、教頭が参加できる・遠方でも参加しやすい等々のご意見、また、・通信環境の安定ができればよい・スタッフの負担が大きい・オンライン対応を増やしてもよい等々のご意見もありました。課題や反省点を次の高知大会に届けられるようにしたいと思います。

石川大会に参加してくださった皆様、石川大会を無事終えましたことを心から感謝いたします。皆様の熱心なご参加により、有意義な時間を共有することができました。

また、全公教本部を始め、前回、前々回の開催地である岩手県や佐賀県の方々、その他、今回の大会を成功させるためにご協力いただいた全ての方々に、感謝をお伝えしたいと思います。併せて、内々のことで恐縮ですが、石川県教頭会事務局の尽力無しには、この大会の成功はなかったということを申し添え、大会の回想録とさせていただきます。